宮部みゆき『蒲生邸事件』と司馬史観

矢野達雄

(一)

愛媛県松山市は、夏目漱石の小説の舞台となったことから「坊っちゃん」の街として全国に名を知られている。今度はそれに加えて「坂の上の雲」の街として打ってでるのだそうだ。

司馬遼太郎の小説に『坂の上の雲』という作品がある。文春文庫で全八巻になる大作だ。この小説の主人公は、正岡子規、秋山好古・真之の三人が主人公だが、この三人はいずれも松山市の出身である。そこで、中村時広市長が青春のころ読んでいたく感激したこの小説をとりあげて、まちづくりに生かそうというわけだ。

中尾先生も司馬遼太郎の小説のファンとお聞きしたことがあるから、多分『坂の上の雲』も愛読しておられるだろう。中村市長の姿勢を諒とされるかもしれない。私とて、市長の個人的趣味をあげつらおうとは思っていない。しかし、市の財政を使って「坂の上の雲」記念館（仮称）つくりに執念を燃やしたり、まちづくりに賛同するか否かを基準に市民のボランティアやＮＰＯ団体を色分けして、賛成する団体には助成するが、そうでない団体は助成対象からはずすなどということになると、「ちょっと、待ってくれ」と言いたくなる。

しかも、日露戦争から百周年、第二次大戦終戦から六十年の節目だ。『坂の上の雲』という作品が浮上してきたのには、何となくきな臭いものを感じる。聞くところによるとＮＨＫがスペシャル大河ドラマと銘打って、二〇〇七年以後にドラマ化することが決まったそうだ。しかし、司馬自身が「この作品は映像に翻訳すると、ミリタリズムを鼓吹していると誤解されるおそれがあるから、映画化やドラマは固く禁ず」と言い遺したいわくつきの作品だ。よく司馬記念財団がＮＨＫ大河ドラマ化にゴーサインを出したものだと思う。

(二)

文芸春秋社から全集を出している作家に、松本清張と司馬遼太郎がいる。いずれも大衆小説界きってのスーパースターだが、きわめて対照的な二人である。読者層も、清張ファンと司馬ファンに二分されるのではないか。この両雄がお互いをどのように見ていたかは興味あるテーマだが、直接言及した文章があるかどうか、私は知らない。

ところで、かの宮部みゆきは、自ら松本清張の弟子をもって任じている。宮部みゆきについては、いまさら注釈の必要あるまい。『理由』『火車』『模倣犯』など、つぎつぎにヒットを飛ばし、今もっとも油の乗り切った社会派推理作家と言って過言でなかろう。私の妻など、あるとき私が『理由』をすすめたところはまってしまい、つぎつぎに読破して、家にはたちまち三〇冊あまりの文庫本が林立した。

宮部みゆきは、直接の師弟関係があったかどうかは別として、小説の作法など大いに清張に学び、清張の短編小説集などアンソロジーを編集んでいる。清張に直接司馬文学を論じた文章がないとすれば、弟子の宮部みゆきに語ってもらおう。

(三)

いわゆる「司馬史観」という言い方がある。司馬自身「自分はビルの高みに立って下の風景を俯瞰するのが好きだ」と語ったことがあり、それが「司馬史観」の真髄を表したものと喧伝されている。例えば司馬は、次のような例をあげている。慶長三（一五九八）年死の床に伏した秀吉が、徳川家康はじめ五奉行を招き、「秀頼こと、よろしくお頼み申す」と繰り返し頼み入れ、五奉行から秀頼の治世に協力するという誓紙を取って、豊臣家の将来は安泰だと安心しながら死んでゆく。ところがわれわれは、その後の歴史の結末を知っているから、その場面を全く別の意味をもって眺めることができる。これが、ビルの高みに立って下界を眺める快感であると司馬は述べている。

このような司馬の歴史観は、結果を知ったうえで因果関係において歴史を捉えようとするもので、基本的に歴史家と同じスタンスに立つ（成田龍一）という評価がなされている。しかし、宮部みゆきはその小説『蒲生邸事件』の中で、このような司馬の観点を批判しているのではないだろうか。

(四)

『蒲生邸事件』は、いわゆる時間旅行ものである。現代の主人公がふとしたことで、二・二六事件のころの蒲生陸軍大将邸にタイム・スリップするというものである。

主人公たちは、その後の大日本帝国の暴走と崩壊を食い止めるため、蒲生大将にその後敗戦までの歴史を見せる。蒲生大将は未来を知り、持論を変え、陸軍内に別の方針を持たせようと努力を重ねるが、二・二六事件は起こってしまう。大将は、同時代の人たちを批判する文書を残して自決した。息子の憲之は、父親を「抜け駆け」であると批判する。そのくだりを引いてみよう。

「だが僕はこの時代の人間だ。この時代をつくっている臆病者のひとりだ。

そして、臆病者としてこの時代を生き抜く義務がある。これから先何が起ころうと、僕は必ず生き抜いてみせる……父が残したあの文書は、汚い抜け駆けの集成だ」

「抜け駆け？」

「そうじゃないか。父は未来を見たんだ。結果を知っていたんだ。知った上で、何も知らずに生きた人たちが、これから成すことを批判したんだ。父ひとりだけが、言い訳を用意したんだ。抜け駆け以外の何者でもないじゃないか」（文春文庫版、六〇九ページ）

また、別の場所で、時間旅行者平田の言を借りながら次のようにも言う。

「大将は未来を知った上、同時代の人たちを批判する文書を残そうとしている。……それは抜け駆けだ。その時代その時代を手探りで生きている人たちを、高所から見下ろす行為だ。やっていいことじゃない」（六一七ページ）

結局大将の残した文書は廃棄され、蒲生大将は歴史の預言者となることなく小説は終わる。

この「高所から見下ろす行為」という表現は、いわゆる「司馬史観」を代表する言辞とされている。このくだりを書くとき宮部みゆきの脳裏には、司馬の小説がターゲットと浮かんでいたことはほぼ確実であろうと、私は思う。

（五）

念のため言っておくが、結果を知った上でその原因を考えたり、歴史上の人物の行為を評価することは、学問としての歴史にあっては当然の行為である。しかし、そのような手法を無媒介に歴史小説の語りに引き入れるとどういうことになるだろうか。

作者は歴史的事件の経過と結果を知悉する者として作中人物の上に君臨する。登場人物の悩み、怒り、喜び、哀しみなどに共感するというより、冷静な観察者として批評の対象とする。登場人物は、歴史の一定方向への進行をあるいは進めようとしたり、ある場合には留めようとさまざまな営為をおこなう。しかし、それらの行為がある程度の効果をもたらすかそれとも無駄となるかすべてはお見通しである。宮部はこれを「まがいものの神」と表現し、この神が作中人物たちの上に君臨することに警戒感を表明している。私は、この神はやがて読者の上にも君臨するようになるのではないかと、皆さんに注意を喚起したい。

司馬は、作中「余話であるが…」などと断りを入れつつコメントを加えている。それは薀蓄であったり、作者の個人見聞であったり、文明批評であったりさまざまであるが、小説としてはきわめて異例である。しかも歴史学やそのほ

かの学問上から見て、必ずしも正確でない情報を述べたり、問題の多い断定をするくだりもある。たとえば、「日露戦争は、当時としてはぎりぎりの力をふりしぼった自存自衛の防衛戦争であった」とする記述などである。しかし高みからの視点に慣らされた読者は、このようなコメントを「司馬さんが言うのだから、そうなんだろう」と、素直に受け入れていくのである。

(六)

『司馬遼太郎と藤沢周平』（知恵の森文庫、二〇〇二年）に、宮部みゆきと佐高信の対談が収録されている。

佐高　……私は、司馬遼太郎という人とちょっと対照的なところなのではないかなと思うんです。やっぱり司馬遼太郎という人は治める者の立場から書いてますでしょう。

宮部　そうですね。

佐高　そうすると見えないものがある。まあ、上からで見えるものがあると言うけども、そうではなくて、やっぱり藤沢さんはどっちかというと運命を含めて操られる者の立場から書いてますよね。

また同じ対談の中で宮部みゆきは、藤沢周平の小説の魅力を次のように語っている。

宮部　働いて、生活しながら、あるコミュニティーの中とか、ある組織の中で成長していく。例えば、『蝉しぐれ』なんかは、武家社会、一つの藩の中で……成長していくみたいな生き方というのが確かにあって、それは決して意味のないものではなくて大切なものなんだということを、教えてくれる。

宮部　ごく普通の人間がごく普通に生きていても、たとえば世間さまに顔向けできないようなことや、もう自分でも思い出したくないようなことの一つや二つ、ありますよね。……生身の人間として、その傷をいっしょに生きてゆく人間を、きちっと書いていくことが大切なんだろうなって、思っているんです。

宮部みゆきは、上からの視点ではなく、庶民の視点から描くことを心がけていると言う。そしてこのような姿勢は、深川ものの先輩、藤沢周平から学んだと述べている。妻は、藤沢周平の本を読み出した。いまわが家には、彼の本が林立しはじめている。

※「坂の上の雲」のまちづくりに関する私の意見は、私のホームページに載せています。ご覧になっていただければ、幸いです。
http://www1.cpm.ehime-u.ac.jp/yano/sub7essay.html